

## ◎小学生の部

太田玉茗賞

### 「新郷駅」

新郷第二小学校 四年

堤 澄心

カン カン カン カン  
しんと静まり返った夜の駅に  
しゃだん機の音が鳴りひびく

#### 「新郷駅」

無人かいさつの小さな駅

私はここに仕事帰りの父をむかえにくる

かいさつ口にちよこんと置かれた

切り返しゆう箱

たった一つしかないけん売機

木ぞうづくりの駅を見ていると

まるでこの場所だけ

遠い昔にタイムスリップしたかのようだ

カン カン カン カン  
カエルの声にまじって  
今日も三両へん成の電車がやってきた

ここが私のふるさと

いつまでも

変わってほしくないと思う

いつかこの小さな駅が

きれいな駅に変わってしまったとしても

私はきつとわすれないだろう

「ただいま」と言って

私のすがたを見つけた時の

あの父の笑顔と共に

## 宮澤章二賞

### ムジナモの気持ち

三田ヶ谷小学校 六年

小林 茉莉亜

ねえ ぼくのこと知ってる？

植物なのに 二枚貝の葉で

虫をつかまえられるんだよ

ちよう高速で 葉を閉じるから

一回とらえたら 絶対に離さないんだ

それにね 閉じた葉から

消化液を出すことができるんだよ

ぼくって すごいでしょ

たぬきのしっぽの形をした食虫植物なんだ

ねえ 私のこと知ってる？

ゆったりと水面に浮かぶ

小さな 小さな 白い花なの

夏の日中 気温と水温の条件が合ったとき

一時間か二時間の間しか咲けないの

しかも 一回限りしか咲かないから

出会えたら キセキね

私って すごいでしょ

かわいい きれいな まぼろしの花なの

でも ぼく達 私達は

みんなの力が 必要なんだ

だから みんながお世話をしてくれて

とってもうれしいの

いつも ありがとう

放流してくれるとき

みんなの 温い心が伝わってくるよ

みんなの 願いを受けついで

宝蔵寺沼で たくさんの命を

つないでいくからね

優秀賞

伝とうのたいこ

井泉小学校 三年

飯塚

皓耶

ドンドン ドンドン  
ドンドン ドンドン  
ドンドン ドン(ソーレ)  
ドンドン ドン(ソーレ)  
ドンドン ドン(ソーレ)・・・  
羽生だいたい「ドンドラ」のひびき  
ぼくはこのひびきが大きすぎだ  
バチをにぎって  
たいこをたたく  
学校の音楽のような楽ふはない  
だからむずかしい  
だから何回も練習する  
左、右と打つとさい後に  
ドン  
大きな音が出る  
そこがはく力がある

「ソーレ」というかけ声は  
気合いが入って気持ちがいい  
この伝とうのたいこを守りたい  
たくさんの人に聞いてもらいたい  
今年の夏は福島にも行った  
羽生のたいこの音が  
福島のおまつりでひびいた  
たくさんのはく手をもらった  
さい高の気分だった

ドンドン ドンドン  
ドンドン ドンドン  
ドンドン ドン(ソーレ)  
ドンドン ドン(ソーレ)  
ドンドン ドン(ソーレ)  
ぼくはこれからも  
このたいこをたたき  
いつまでも伝えていきたい  
守りつづけたい

## しあわせな時間

新郷第一小学校 二年

小川 恭佳

ぎゅっ

お母さんと手をつないで  
通学はんの待ち合わせ場しよまで歩く  
少しの時間だけど 毎日お母さんと  
この道を歩く朝のさんぽは  
とても楽しい

今日は学校の算数で何をするのかな  
友だちとなかよくできるかな  
ちよつと心ばいながあっても  
「だいじょうぶだよ。」  
というお母さんの言葉はまほうの言葉  
安心するのでふしぎ

通学ろには 木や花がたくさんある  
きせつによってかおりやけしきがかわる  
お母さんも わたしと同じ学校で

同じ通学ろで通っていた

むかしもじんじやにさく桜やうめ  
角の家のふじの花 もみじの木など  
同じけしきを見ていたんだなと思うと  
とてもうれしくなる

わたしも大人になって  
いつかわたしの子どもと手をつないで  
「だいじょうぶだよ。」  
と、まほうの言葉をかけてあげられるお母  
さんになりたい  
そして、この道をいっしょに歩きたい

## おおきなて

手子林小学校 一年

蓮見 凜

わたしのうちはペンキやさん  
おじいちゃんも  
そのまたおじいちゃんも

ものおきにはたくさんのペンキ  
とてもきれいないろなのに

クレヨンみたいなへんなにおい

ほいくえんのやねも  
しやくしよも

おにくやさんも  
ぜんぶおとうさんがぬったよ  
おとうさんのては  
いつもいろんないろで  
ときどきかおにもついでるよ

たいようをあびて  
まっくろになったおおきなて

そのてにだっこされるのが  
だいすきだよ

こんどペンキのぬりかた  
おしえてね

## 佳作

### ふるさとを知る

新郷第二小学校

六年

柿沼

郁哉

「しん」と静まりかえった会場  
読み札が読まれると  
あちらこちらで  
「はい」という声がひびく

ぼくは三年生の時から  
郷土かるたをやっている  
みんなが協力して戦って  
勝ったときがうれしい  
だから個人戦もあるけれど  
チームで協力して戦える  
団体戦が好きだ  
ぼくが取れなかったところを  
チームメイトが  
カバーしてくれたとき  
心の中でありがとうって思う

自分の前の札を相手チームに取られると  
がっかりしてしまふけど  
チームメイトの顔を見ると  
気合いが入る

埼玉の歴史や文化や自然の  
すばらしさを伝えてくれる  
郷土かるたがすきだ

今年最後のかかるた大会  
思いっきり自分の力を発きしたい  
そしてみんなと協力する楽しさを  
思いっきり味わいたい

## いろんなぼく

須影小学校 五年

ぼくについて考えた  
いろいろなぼく

ガオー  
おこっている時のぼくは  
小さなライオンになる

わくわくわく  
うれしい時のぼくは、  
にこにこにっこり  
えがおになる

よしよしよし  
犬といっしょにいる時のぼくは  
心のへやがあたたかくなる

ほかほかほか  
おじいちゃんとおばあちゃんと  
いっしょにいる時のぼくは

見守られているという大きな安心感がある

しくしくしく

かなしい時のぼくは

小さなしあわせにであいたくなる

いろんなぼくがいるけれど

すべてがぼくの大切な気持ち

大事に大事に

むきあっているこう

## 田んぼの海

新郷第二小学校 四年

萩原 一帆

サワサワ  
夕ぐれ時の田んぼを  
風が通りすぎてゆく  
まだ緑のいねはそよそよとゆれる  
波のように  
あたり一面が田んぼの海になる  
少し前にしずんだ太陽が  
西の空をしゅ色にそめた  
東の空はぐんじよう色  
ぼくのとなりにいる犬は  
立ち止まり  
風に顔を向け  
鼻を上げて  
風のおいを感じている  
風とおはなしをしているかのように  
どこからきたの  
むこうの山から  
ザザ  
今度は少し強い風が

通りすぎてゆく  
ユキ ハナいい気持ちだね  
そう言つてぼく達はまた歩き出す  
明日もいい天気



## 方言の温もり

須影小学校 四年

藤井 萌恵

じいちゃんとお中元をとどけに出かけた  
こしを曲げた元気なおばあさんが庭にいて

「あがつてかつせ」

と言つて 家の中に入つて行つた

えっ、かつせて何？

「家にあがつていきなさいって事、この辺の  
方言だよ」

私の心の中を聞いていたかのように じいち  
やんが笑顔で答えてくれた

「今日は いら暑いんだに」

「食わつせ ほお」

「よくかんまして飲まつせ」

「だいじゆかい？ つつぺったら痛かんべ」

「なんでなんで また来てくらつせ」

おばあさんは うれしそうに大きな声で

私達と色々な話をした

じいちゃんやばあちゃんと話す年配の方達は

こういう言葉をたくさん使う

何て言っているのか あまり分からないけど

言い方が強くてこわいなと思う時もある

少し早口な感じが面白かったりする

方言というのは 地いきの特別な共通語

ていねいな言葉とはちがった

相手への親しみと その人の温かい気持ち

そのまま表れて伝わってくる

ふつうの言葉にはない 不思議なパワーが

おたがいを もつと近づけてくれる

おばあさんと話していると

かんげいさされているのが私にも分かり

いつの間にか きんちようがほぐれて

友達になったような気分になった

「どこ行ってきたん？」

「そうなん」

私が使っている言葉にも 相手をなごませる

温もりがあるといいな

## 利根川の土手

川俣小学校 六年

森田 祐生

ぼくの家のおすぐ裏  
広々とした利根川の土手  
春から夏は緑の楽園のようだ  
ぼくは走ることが好きだ  
時々ひとりでここを走る  
虫の声や小鳥のさえずり  
利根川の水の流れる音  
鉄橋を渡る電車の音  
そこにふく風が  
いろいろな音を運んでくる  
いやなことがあったとき  
うまくいかずくじけそうになったとき  
ぼくはひとりで土手を走る  
「元気だしなよ」  
そこにふく風が呼びかけてくれる  
またそこはぼくの体力アップの強い味方

運動会や陸上の大会前のトレーニング場  
苦しい時やめげてしまいたいような時  
そこにふくやさしい風が背中をおしてはげま  
してくれる  
「がんばって」  
「あきらめるな」

夏休みの終わるころ  
夕方雨がりに土手に行った  
とても夕焼けがきれいで感動した  
雑草が背よりいちだんと大きく成長し  
風に気持ちよさそうにゆれていた  
なんだかとても強くたくましく見えた  
この利根川の土手こそが  
ぼくの自まんのふるさとだ  
そしてぼくの未来のスタートライン  
いつまでも見守っていてね

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
つうがくいちねんせい	手子林小学校 一年	鳥海 瑠璃子
ししまい	手子林小学校 一年	間篠 梨々華
登校	手子林小学校 四年	福島 尊翔
いろんな緑	手子林小学校 四年	森重 涼世
藍ぞめと私	手子林小学校 五年	阿久津 匡華
かかし	須影小学校 二年	近藤 知輝
ゴーヤのように	村君小学校 四年	増田 陸斗
あさがお	新郷第二小学校 一年	おかむら れいな
おひまち	新郷第二小学校 四年	川畷 美穂
「輝き」	新郷第二小学校 六年	堤 莉穂

## ◎中学生の部

### 太田玉茗賞

あいさつ

東中学校 二年

志賀 聖

そのころから毎日のように  
仏様に手を合わせている  
ばあちゃんちに  
一緒に住んでいたころからの習慣だ  
となりに越してからは  
出かける前の挨拶が日課となった  
中学生になって  
なかなか遊びに行けないけれど  
朝の挨拶はずっと続けていきたい  
大人になっても続く  
僕の習慣となるように

登校の時間が来た  
僕は隣のばあちゃんちの玄関を開ける

「おはよう ばあちゃん。」

仏様に線香をあげ

じいちゃんにも挨拶をする

「今日も一日頑張ってくるね。」

行ってきます。」

じいちゃんからの返事は無いけれど

どこかできっと

見ている気がする

じいちゃんが亡くなったのは

僕が幼稚園児のころ

## 宮澤章二賞

### 僕の自由時間

西中学校 二年

坂本 光

部活が終わって家までの帰り道  
その時間というのは  
何を考えていたっていい  
僕にとっての「自由時間」だ

帰り道のルートは決まっていなくて  
1人の時や友達と帰る日もある  
すでに自由なだけだ  
頭の中はもつと自由だ  
大好きなサッカーのことを楽しく妄想する  
好きな曲を頭に浮かべて鼻歌を歌う  
今日あったことを振り返ってもいい  
何を考えていたっていいのだから  
どの帰り道でも周りに何もなくて

田んぼばかりでつまらないと思っていた  
けどそれがよかったんだね  
毎日やってくるこの時間  
部活でヘトヘトなときでも  
そんな自分を見つめ直せる  
僕の自由時間  
この時間は僕にとって「特別」だ

## 優秀賞

### けやき

西中学校 二年

飯田 萌恵子

両手を広げても、幹の太さに届かない  
我が西中学校のシンボルツリー  
けやき  
私が生まれるずっとずっと前から  
ここで生徒を見守り続けてきた  
私の父や母はどんな中学生でしたか？  
ジリジリと焼けつくような日差しを浴びて  
汗ばんだ私に  
木の葉のミストが優しい風を運んでくれる  
なんて気持ちが良いのだろう  
ここが学校であることを忘れてしまう  
マイナスイオンは、心の中まで染み渡り  
透明になり浄化されるようだ  
耳を澄ませば聞えてくる  
「ファイトファイト」の掛け声  
軽快な吹奏楽のリズム

激しく竹刀を打ち合う音  
活気に満ちた音が  
学校中に溢れている  
そこからのながめはどうですか？  
「そんなちっぽけな事、気にするな。」  
「長い人生、どうってことないよ。」  
風にそよそよ葉をゆらしながら  
優しく私に語りかけてくれているよう  
失敗を恐れずに挑戦してみよう  
このけやきの木のように  
周りの人に潤いを与えられる人になりたい  
緑のそよ風を全身に浴びながら  
この夏私は少しだけ  
心を強くした

## 今、この時を

東中学校 一年

関根 多香美

あるよく晴れた朝。

真新しい制服に袖を通しながら、まだよく回らない頭でぼんやりと考えた。

「今日から中学生…。」

ハッとして目が覚める。

「そうだ!! 今日から中学生。」

新品の自転車にカバンをつんで

「いざ出発!」

初めての校舎、初めての教室。

教室に入る前一瞬の緊張が走る。

そこには、新旧入り乱れた友達がいた。

人見知りもせず「どうするん。どうするん。」  
を連発する人。

緊張で顔がこわばってる人。

私はそつと周りの様子を見回してみる。

中学校生活が始まり、妙な緊張も解けク  
ラ  
スに慣じんできた。

楽しかった体育祭。

私の得意とするところ。

終わった時には、みんなずっと一緒にいた  
ような気持ちになった。

そうして迎えた夏休み。

ほつと一息リラックス。

新学期はどうなるのかな?

やっぱり早くみんなに会いたい。

こうして始まり、これからも続く私の中学  
校生活。

私が大人になった時、ふるさとの情景の一  
つとして思い出すのだろう。

今：この時を。

## 夏

東中学校 三年

横田 孟志

夏になるとやってくる  
一 昨年の夏からやってくる  
玄 関の窓にやってくる  
こ れって何と聞いてみる  
母 はヤモリと言っている  
本 当にヤモリか分からない  
窓 にペタツとくっついて、小さな虫を食べている  
朝 になると居なくなっている  
夕 方になるとまた戻ってくる  
だ から家の守り神  
夏 が終わると居なくなる  
ど こへ行ってしまったのか、死んでしまったのか、  
僕 には分からない  
今 年も夏がやってきた  
玄 関にヤモリが帰ってきた  
今 年の夏はもう一匹  
赤 ちゃんをつれてやってきた  
家 の守り神がもう一匹  
今 年はきつとよい年だ



# 佳作

## 駅伝

東中学校 二年

岡戸 宏樹

「タッタッタッタハッハッハッハッハッハッ  
と足音と息づかいがリズムをきざむ  
木々のゆれ、心地よい風を感じながら走る  
羽生陸上競技場の緑の中を隊列をくんで走る  
澄んだ空気は、ぼくらをいやしてくれる  
季節を感じながら今日も走る  
この夏、東中の駅伝チームを結成した  
陸上部に入っている僕は相手の記録が気になる  
いつも仲間はライバルだ  
でも駅伝はちがう  
仲間と心をつなげて走る  
チームが同じゴールを目指して共に走る  
たすきを次の人へ次の人へとつないでいく  
マラソンは孤独な戦いだ  
途中で苦しくて、歩きたくなる事もある  
でも仲間がぼくを待っている

たすきをつなげなければ仲間の努力がむだになっ  
てしまう  
だからチームのために最後は根性で走る  
たすきに仲間の思いをつめこんでゴールまでつな  
いでいく  
一人で走るよりチームで走るとパワーがむくむく  
わいてくる  
中学に入って二度目の駅伝シーズンがやってくる  
チームのために今日も走ろう

## 木のトンネル

東中学校 一年

佐藤 歩夢

堀越館付近の道を歩く

ミーンミーン

カナカナカナカナ

道の両わきは 竹林と雑木林  
まるで木のトンネル

トンネルを進むと

ミーンミーンミーン

カナカナカナ

どしや降りの雨みたいな虫の声に  
ぼくはずぶぬれる

夏は毎年 こんな音がしているのかな

何十年

何百年も前の

堀越館がまだ建てられたばかりの頃の

昔々の人たちも

この虫の声を聞いていたのかな

夏の痛いくらいの陽ざしに対抗するような

いせいのいい虫の声に

お前は暑さにバテたりしないのか？と

不思議に思った人はいたのかな

うるさいなと思った人もいたかな

そうして藍染めの手ぬぐいで

汗をぬぐったりしたのかな

堀越館の木トンネルは

昔の人とひよっこり出会えそうな道

ワクワクするから

ぼくはわざと、ゆっくり歩く

うた

東中学校 一年

渋山 ひかり

音楽

それは神様からもらった 宝箱

歌声

それは宝箱に入っていた 宝石

私たちがもっている その宝石は  
一人一人 違う色や形をしている  
その宝石が たくさん集まったら  
「一緒に歌おう」

ほら 見て 宝石がきらきらと  
光っているでしょう  
輝いているでしょう

その光は きれいな色をしていて  
絵の具のように 混ざりながら  
何かを 描いている

あまりにまぶしいから  
目を閉じてしまおう

じゃあ その代わりに  
耳をすませて よく聴いて

大きな木から こっちに向かって  
葉が 次々に舞い降りてくる

伝わっているかな  
この歌に こめられた  
意味が 願いが 夢が

きれいに輝く言葉を  
美しく光る旋律にのせて  
さあ歌おう

聴いていてね  
今 あなたに伝えるから

## 朝の楽しみ

東中学校 一年

関口 ひより

ごめんねと思いつながらお腹から猫を下ろす  
今日もがんばるねと猫の頭をなでる  
ニヤーと鳴いてまた目を細める  
猫からエネルギーをもらい一日が始まる

「起きなさい」  
お母さんの声がする  
でも、私はすぐには起きない  
ある事を待っている  
チリン  
鈴の音が近づいてくる  
来た来た  
ベットの上にジャンプしてきた  
おはようと言っているように  
ニヤーと鳴く  
待っていたのは猫だ  
いつものようにお腹の上に乗ってくる  
じんわりと温もりが伝わる  
なでると目を細めてまたニヤーと鳴く  
そしてゴロゴロと喉を鳴らす  
なんてかわいいんだろう  
いつまでもこうしていたいけど  
そうもいかない  
なごりおいしいけど起きなきゃいけない

## 梅の木

東中学校 二年

福田 あみ

今から十三年前、  
私は生まれた。  
同時に植えられた、  
梅の木。  
梅の木と私は、  
まるで双子のようだった。  
私がすすくすすく育ったら、  
梅の木もすすくすすく成長した。  
私が笑ったら、  
梅の木も花を咲かせて笑った。  
私が泣いたら、  
梅の木も毛虫に実を食べられて泣いた。  
私がねると、  
梅の木もねむった。  
十三年間、  
ずっと一緒にいた。  
ずっと一緒に生きてきた。  
でも一つだけ、

私は梅の木に負けた。  
それは  
台風や強風がきても  
梅の木はめげずに  
細い一本の足で  
立ち続けている。  
そのあきらめない心に  
私は負けてしまっている。  
だから  
私は見習いたい  
これから何十年と生きていく中で、  
あきらめない心は大事。  
友達・家族も大事。  
私にとって  
梅の木も大事。  
梅の木が頑張れば、  
私も頑張れる。  
だって双子だもの。  
いつもありがとう。  
梅の木。

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
笑って引退するために	東中学校 二年	古橋 萌加
ふるさと羽生	東中学校 二年	渡辺 啓太
夢の架け橋	南中学校 一年	清水 健太
田園	西中学校 一年	吉田 詩音
心の中のふるさと	西中学校 二年	池澤 萌々香
「日常」と「幸せ」	西中学校 二年	岩田 真一
グミの木	西中学校 三年	森田 朋子
私のふるさと	西中学校 三年	田中 亜美
今年のお盆	東中学校 一年	熊倉 七夏
お盆	東中学校 一年	中島 優生樹
空とともに	東中学校 二年	増田 花恋